

二〇一九年七月一六日(参加者一五名)

岩裾に群落なせる水引草	明日香
黒揚羽森の暗きに消えにけり	明日香
石走る真白き波や青葉闇	明日香
手招きにあらず藪蚊を払ひけり	明日香
すだれなす青楓より滝落つる	せいじ
山荘の深庇より青楓	せいじ
梅雨明けてせせらぎに綺羅戻りけり	せいじ
岨道に堵列してをる梅雨茸	せいじ
溪涼しせせらぎの音呂に律に	菜々
岩落ちて落ちて高鳴る山清水	菜々
六甲の峰より発し夏の雲	菜々
山荘の一步に庭の苔涼し	菜々
青しぐれ神の櫂を仰ぎけり	うつぎ
山峡の空を狭しと雲の峰	うつぎ
姿よき天然鮎を丸齧り	うつぎ
万緑の底ひに白き瀬波かな	はく子
あぢさゐの枝奔放に水際まで	はく子
万緑を洩れくる日の斑川面へと	はく子

と行き斯く風吹き惑ふ青田波	ぽんこ
蝶飛来無縁仏の寧かれと	ぽんこ
翻りては風いなす蓮広葉	ぽんこ
大輪のピアスの揺るる浴衣かな	こすもす
大型のキャリー引きずるアロハシャツ	こすもす
合掌の緩みがちなる滝行者	素秀
砂丘ゆく駱駝は影絵大夕焼	素秀
風鈴の鳴るたび猫の耳動く	宏虎
麻暖簾頭で分けて友来る	宏虎
車道這ふ蚯蚓の無事を祈りけり	よし子
梶の葉に恋の願ひの女文字	よし子
夏の雲もろともビルの窓磨く	たか子
不機嫌な夫を横目に髪洗ふ	もとこ

定例句会みのる選

二〇一九年七月一六日(参加者一五名)